立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）
個人研究
２０１７年度研究成果報告書

	所属部局･職	氏　名
研究代表者	現代心理学部・助教	江口　正登　　印
研究課題	パフォーマンス・アート及びパフォーミング・アーツの「再現的上演」に関する研究	
研究期間	２０１７　年度	
研究経費（1円単位）	（支出金額）845,000 円／（採択金額）845,000 円	

研究の概要（２００～３００字で記入、図・グラフは使用しないこと）

本研究の目的は、近年国内外におけるパフォーマンス・アートや舞台芸術の研究と実践の場において注目を集めている、「再現的上演」という事象についての検討である。

「再現的上演」とは、字義通りには、「過去に行われたある上演行為の再現を試みる上演」であり、たとえば、舞台芸術における「再演」行為や、現存しない過去の上演形式の「復元的上演」もこれに含まれる。しかし、近年特に注目を集めているのは、パフォーマンス・アートなどの、原理的に反復が不可能もしくは無意味であると一般に見なされてきた上演行為をあえて反復する、「リエナクトメント」と呼ばれるタイプの実践である。本研究ではこうした状況を踏まえ、リエナクトメントを中心に据えつつ、「再現的上演」一般についての検討を行う。

キーワード（研究内容をよく表しているものを３項目以内で記入。）

〔　パフォーマンス・アート　〕〔　パフォーミング・アーツ　〕〔　リエナクトメント　〕

研究成果の概要（図･グラフ等は使用しないこと。）

A．資料収集

本研究では主に、①「再現的上演」に関連する資料一般および②リエナクトメントの代表的な事例であるマリーナ・アブラモヴィッチの上演企画《七つの易しい作品》（グッゲンハイム美術館、2005 年）と《ジ・アーティスト・イズ・プレゼント》展（ニューヨーク近代美術館、2010 年）の関連資料という二種類の資料の収集を行った。いずれに関しても、展覧会カタログや出版された著作などを多く購入した。また、2018 年 1 月末～2 月初旬のアメリカ出張時には、国内では購入不可能な資料の収集に加え、プリンストン大学にあるリチャード・シェクナー・アーカイヴおよびニューヨーク近代美術館アーカイヴ、グッゲンハイム美術館アーカイヴを訪問し、資料収集および調査を行った。

B．事例調査・分析

①《七つの易しい作品》および《ジ・アーティスト・イズ・プレゼント》に関して、資料の収集を行い、調査を進めた。《七つの易しい作品》は、アブラモヴィッチが、新作の上演に加え、自らおよび他のアーティストによる過去の著名なパフォーマンス作品のリエナクトメントを行ったイベントである。したがって、ここでは、再演の対象となった各作品にまで資料収集・分析の範囲を広げた。通常の資料の購入に加え、グッゲンハイム美術館アーカイヴでは記録映像の視聴などを行い、ニューヨーク近代美術館アーカイヴでは、同作のリエナクトメント対象のひとつヴィト・アコンチの《苗床》およびその他アコンチの同時期の創作活動に関して調査を行った。結果として、アコンチによるオリジナルの《苗床》の上演が行われたソナベンド・ギャラリーと、アブラモヴィッチによるリエナクトメントの行われたグッゲンハイム美術館との、地理的条件や文化的位置の差異をより明確に把握することができた。これによって、オリジナルとは不可避的にずれをはらんだものになってしまう、という、パフォーマンス・アートのリエナクトメントがはらむ基本的な問題を具体的に検討するための材料を得ることができたといえる。

《七つの易しい作品》が、美術館を舞台とするものでありながら、基本的には七日間という短期間の内に集中して実施される、いわゆる「イベント」であったのに対し、《ジ・アーティスト・イズ・プレゼント》の場合は、リエナクトメントを伴うものでありつつ、長期にわたる「展覧会」である。後者に関しては、この「展覧会」というフレームを考慮した上で検討することが重要である。関連文献の読解に加え、ニューヨーク近代美術館で、実際の展示会場となったスペースの視察を行った。

②研究内容と関連すると考えられる展覧会や上演に多く足を運んだ。今日行われているリエナクトメントは、その多くが美術館でなされている。すなわちここには、過去の上演を再現するということに加え、本来はそれとは異なる文脈や状況においてなされた上演を、美術館というきわめて制度的な性質を帯びた環境に移しかえること、という二重の問題がはらまれており、後者の問題はさらに、本来は美術館とは別の環境（劇場など）を自らの住まいとしてきた上演芸術と美術館との関係というより大きな問題に接続して考えることができる。こうした問題関心に基づき、上演芸術と美術館との関係を問うような展示および上演の調査を行った。対象となった展示あるいは上演は合計六本である。それぞれの形式上の特性と抽出しうる論点を簡潔に述べる。

（ｉ）「イヴォンヌ・レイナーを巡るパフォーマティヴ・エクシビジョン」（京都芸術劇場 春秋座、2017 年 10 月）。アメリカのポストモダン・ダンスの中心的人物の一人であるイヴォンヌ・レイナーの資料や映像の展示に加え、『Trio A』および『Chair/Pillow』のリエナクトメントが行われた。上演芸術の展示であるが、これにもう一段階ひねりを加えて、劇場を展示空間として用いるという点にキュレーション上の企みがあったと思われる。しかしながら、劇場ロビーや客席内の周縁部が展示に用いられ、ステージでリエナクトメントが行われるという構成は、上演と資料を主 - 従として、一般的な劇場空間の中心性を無批判に保ってしまっているようにも思われた。

（ⅱ）金氏徹平『tower（THEATER)』（ロームシアター京都、2018 年 10 月）。美術家の金氏による演劇作品。金氏の手による、塔のような巨大な造形物が中心となる作品であり、劇作家・演出家の岡田利規や、小説家の福永信がテキストを提供している。作家の書いたテキストをもとに舞台美術が構想されるのが通常の演劇作品であるのに対し、ここでは、造形物（＝舞台美術）に対してテキストを執筆する、という風にその関係が逆転しており、美術の視覚的・造形的要素と、演劇の言語的要素との交渉という問題が提起されていた。

（ⅲ）トリシャ・ブラウン・ダンスカンパニー『Anthology: Trisha Brown』（京都府立文化芸術会館 ホール、2017 年 11 月）。先のレイナーと同じくポストモダン・ダンスの代表的人物の一人、ブラウンの過去作品の上演。自カンパニーでのレパートリー上演であり、リエナクトメントではなく通常の意味での「再演」であるといえる。今回はそれぞれ 1980 年、2000 年、2009 年に制作された三作品が再演されたが、1980 年の作品と残りの二作品との質的な差異が注目された。今日リエナクトメントの対象となるのは 1950 年代から 70 年代頃の作品であることが多いが、この 1980 年の作品はぎりぎりその時代に属しているといえ、当時の上演芸術の傾向についての理解を深めることができた。

研究成果の概要（つづき）

（ⅳ）カオス*ラウンジ新芸術祭 2017 市街劇「百五〇年の孤独」（いわき市泉駅周辺、2018 年 1 月）。キュレーターの黒瀬陽平を中心とするアーティスト・コレクティヴであるカオス*ラウンジによる展覧会。演出家の寺山修司の「市街劇」というコンセプトを参照し、展示の鑑賞行為の総体が一種の演劇的経験を構成するよう構想されており、上演行為の展示とは逆方向の操作としての、展示の上演という風に把握することができる。何をもって展示が演劇的であるとみなすかがポイントであるが、本展の場合はその物語性の明確化、したがって鑑賞経験の求心的な方向づけという点にそれが求められていると思われた。

（ⅴ）タニア・ブルゲラ《無題（ハヴァナ、2000 年)》（ニューヨーク近代美術館、2018 年 2 月）。生身のパフォーマーを素材としたインスタレーション作品。キューバの歴史へのアレゴリカルな言及を行う委譲型パフォーマンスであるが、美術館の内部の一区画を完全に変容させてしまう、インスタレーションとしての強度が目を引いた。

（ⅵ）「キャロリー・シュニーマン：キネティック・ペインティング」展（ニューヨーク近代美術館 PS1、2018 年 2 月）。パフォーマンス・アートの最初期の世代に属する作家の大規模な回顧展。リエナクトメントの類は行われず、写真や映像などの資料や、シュニーマンの造形作品の展示、また、シュニーマンがパフォーマンスを行った「エンヴァイラメント」と呼ばれる演劇的に構築された空間の再現展示がなされていた。生身のパフォーマーによる上演行為ではなくとも、造形物や空間自体がパフォーマンス的な質を伴っている場合、それらの再提示はやはり一種の再現的上演としての性質を帯びる、という例として位置づけられる。

C．理論的成果

①パフォーマンス・アートというジャンルの本性についての考察。リエナクトメントという行為が、もともと舞台芸術ではなくパフォーマンス・アートに関して言われるものである以上、そもそも前者と後者の差異がどこにあるのか、後者の特性とリエナクトメントという行為の関係はどのようなものであるのかを明確化する必要がある。こうした作業の一端として、パフォーマンス・アートの展開を通時的に検証し、その本性というべきものが決して超歴史的に固定的なものとはみなされえないことを確認した。たとえば、1950-60 年代には間ジャンル性、間メディア性の問題が前景化しているのに対し、70 年代にはフォーマリズム的な関心が強まり、その後 80 年代以降は政治性が前景化するのに伴ってナラティヴ的な要素が強まる、という流れがある。そして、今日のリエナクトメントの対象となっているのが、概ね 50-70 年代、とりわけ 70 年代の実践であるということを考慮し、フォーマリズム的な志向とリエナクトメントとの結びつきについて、より仔細に検討していく必要性を確認することができた（成果）。

②リチャード・シェクナー「復元された行動」理論についての考察。パフォーマンス研究の学問的基礎づけを行った人物であるシェクナーの論考「復元された行動」の詳細な検討を行った。シェクナーの議論は、パフォーマンスという事象は必ず何らかの意味での「復元された行動」であるということを、さまざまなパフォーマンス形式を例に取りながら論じていくものであり、ある行為が別の行為を復元する、という際の諸パターンが検討されている。シェクナーがこの論考を執筆した当時には、今日なされているようなパフォーマンス・アートのリエナクトメントという事象は一般に存在してはいなかったと思われるが、シェクナーの議論はこれにも応用して考えることのできるものであることを確認した。このシェクナーの論考の抄訳および解説を、2018 年中に刊行予定のあるアンソロジーに執筆した。

③W・B・ウォーゼンのドラマ理論についての検討。ウォーゼンは今日のアメリカの代表的な演劇理論の研究者であり、その議論は、メディア史的なパースペクティブに基づきつつ、ドラマとその上演との関係を、前者を具体化ないしは記録するための技術的・物質的基盤の変容（口承／写本／印刷物／映像／デジタルメディア）と重ね合わせて理解すべきと主張するものである。ここでのドラマと上演との関係についての分析は、リエナクトメントを支える、記録と記憶の補助のための諸手段とリエナクトメントとの関係の分析にも敷衍することのできるものだろう。

D．人的交流

2017 年 6 月に群馬県のアーツ前橋で行われた表象文化論学会第 12 回大会よび 2017 年 11 月に愛媛大学で行われた日本演劇学会 2017 年度研究集会に参加し、出席者たちと議論を交わした。表象文化論学会は、メイン・シンポジウムのテーマを「パフォーマンスと／しての展示」としており、本研究の内容とも直接に関わるものであった。報告者は大会実行委員に加わり、同シンポジウムの企画立案に関与し、その過程でも多くの有益な意見交換ができた。演劇学会は「演技術からみる身体」を大会テーマとしており、身体的な技術や形式の伝承という意味ではリエナクトメントの問題と関わるものであり、ここでも有益な議論を行うことができた。

研究発表（研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。）

①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）
③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

① なし

② （辞書項目執筆） アメリカ学会編、丸善出版、『アメリカ文化事典』、2018 年、917 頁。（「パフォーマンス・アート」pp. 694-695 を執筆）

③ なし

④ （学会発表） 江口正登、「アメリカ合衆国における（ポスト）ドラマ理論の展開」、西洋比較演劇研究会、成城大学、2018 年 1 月 20 日